

Title	人類史は本番を迎える
Author(s)	大木, 英夫
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume18, 2003.2 : 55-58
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3211
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

『人類史は本番を迎える』

大木英夫

一 衝撃…世界史の開示

ヘーゲルは、ナポレオンがイエナの街を行くのを見て、衝撃を受けた。世界精神が馬上街を行く、その衝撃が世界史的展望を開いた。二一世紀とは何か、そして第三ミレニアムとは何か。歴史は自然のようには眼に見える世界ではない。だから開示がなければならない、衝撃が必要である。二一世紀開始の年二〇〇一年九月一日は、巨大な衝撃を全世界に与えた。衝撃はあまりに異質でかつ巨大で、いまだにはつきり言葉で捉えられない。元旦の世界の著名人々たちによるテレビ討論は、それが中心話題となった。だが、「群盲象を撫でる」のようで、人間の言葉まで崩壊している。大きな転換期と感ずる点では同じであった。この衝撃は世界史の隠れた深層を開示する。

世界史の深層を開示する衝撃としてイエス・キリストの十字架の出来事が挙げられる。世界史は、この出来事を中点として前史と本史とに分けられた。フォーサイスは、イエス・キリストの十字架に、歴史の神義論的問いの「答え」を見た。「神義論」という概念はヴェーバーの書を読む人は出会うことだが、世界史における不条理の問題

との関わりである。「世界史は神と直結する」と言われる。そして世界史の不条理が神の義の問題を惹き起こす。もしイエス・キリストの出来事が神義論的問いへの「答え」の開示であるなら、マンハッタンの巨大な事件は何を開示するか。それは、現代史の動向とそこに内在する矛盾の中で高じてきた神義論的「問い」の開示である。そして、二一世紀とは何か、第三ミレニアムとは何か、という「問い」を開示する。問いがはつきりしないならば、答えが分からない。それが今日の閉塞感となる。問いの展望によつて開ける世界史は、問いの観点から、世界史の前史と本史とを分ける。「本史」と言うのは、歴史が自然から自由になつて行く歴史の本質を現し出したからである。

二 理性と靈の区別…自由の問題

ヘーゲルは理性と精神（ガイスト＝靈）を同一視した。イエナの衝撃から世界史を理性の展開と見た。しかし、マンハッタンの出来事の問いの啓示は、この同一化を破る。ラインホルド・ニーバーは、靈と理性とを区別した。あの事件は理性レベルの事件ではなく靈的次元の事件である。現代文明のシンボル同士とも言ふべき摩天楼とジェツト機の巨大にして凄惨たる無理心中、空に立ちのぼる黒煙を残して世界貿易センターはもろくも崩壊する。そこに普通眼に見えない靈の次元が、理性を悪用するという仕方で見えるようになる。過去五百年の近代化を通して、人間の存在を幾重にも被う自然の厚着を脱ぎ捨て、隠された靈的本質としての自由が現われ出した。歴史の中にうごめきながらきた人間の自由は、二〇世紀の二大世界戦争を通して急に増大し、三十年前は月着陸を遂げ、今やクローン人間を造るという絶壁まで近づいた。しかし、それは自由の量的拡張であり、その量的次元ではその中に潜む質的問題はよく見えなかった。今や、理性の背後にある靈の問題が見えるようになった。それは、自由の質の問

題、自由の悪用という途轍もない問題である。

たしかに自由の悪用の問題はアダムとエバの昔からあった。聖書はその問題性を「罪」と呼んだ。自由という甘美なる杯の底に苦い澱が沈んでいる。近代人は、自由の杯をその澱まで飲んだ。自由の悪用は、自然法的制約を破つてはびこり出す。モダナイゼーションとグローバリゼーションは自由の増大をもたらす。しかし、自由の増大は罪の増大を伴う。マンハッタンの事件は、近代的自由主義の根底にある自由のコンテキストにおいて生じた。近代的自由は、内面の自由だけではない、外的な社会の自由として現われる。他者の自由に対して寛容である自由である。しかし自由を否定する自由に対しても寛容であることができるか。自由社会の開放された空のどこからでも悪（テロもその一つ）が入る。いや、空からだけでない、自由は開放的である。だから魂の底からも入る。人間の自由とは、そこで神と悪魔が争う場である。自由が強大化すると逆に弱体化する。この逆説の割れ目から罪の問題が見えてくる。強い自由の国の弱さ、そのジレンマは、罪の考察まで行くことを停止させない。

三 世界史的問題と取り組む大学

あの事件は、大震災のような自然的災害ではない、人為的災害である。人為的悪を人為的善をもって人類がどう克服できるか、それは政治において、金融において、経済において、つまり人為の各方面での営々たる努力を要求するであろう。教育はどうか。

モダナイゼーションとグローバリゼーションを停止させられないことを世の識者は認める。正月のテレビは中国を取り上げた。WTC（世界貿易センター）の崩壊にもかかわらず、中国はWTOに加盟した。その動きはそれに

逆らうよりは善にして賢い人爲をもつて運転するしかない。人爲とは結局人間の問題である。そこに教育の課題がある。近代化は革命的な社会構造改革を前提とする。中国は社会主義革命を改革開放へと転用しようとしてきた。中国が日本を追い抜くかと恐れる声もある。そこで問題は、日本は革命を経ていないことである。だから人間の社会的な停滞が改革を阻止する。もし先見の明のある政治指導者ならば、敗戦を契機としてつづく戦後五十年は（EJが共通通貨ユーロ体制を造ったように）その人間的社会的基盤づくりに全力を傾注して日本を二一世紀へと準備すべきであった。その仕事をさぼった、そのつけが今日の教育崩壊という人間の危機として現われた。「失われた十年」どころか、戦後五十年が失われた。今や日本のすべての悪路は人間の問題に至る。あの事件から開けてくる世界史の展望は、二一世を通じての長いたたかい、いや、第三ミレニアム千年に及ぶ長大なたたかいとなるであろう。九月一日の事件は、世界史的事件であつて、軍事的対応ですむものではない、日本にとつては教育の課題として受け止められねばならないと思う。

近代世界における自由の問題を深く考えるならば、フォーサイスが二千年前のイエス・キリストの死の出来事の中に神義論の「答え」を見た洞察を認めざるを得ない。「答え」は既に与えられている。しかし「問い」がはつきり出るまで二千年を要した。遅れて出てきたこの「問い」は二千年前与えられている「答え」を求めて行くだろう。教育はこの「問い」とあの「答え」の間にあつて、キリスト教教育とならざるを得ない。人間と文明の未来は、良い自由をもつて悪い自由を克服する可能性にかかると。そういう意味で、人類史は本番を迎える。この問題の取り組みが聖学院大学の存在理由となる。聖学院大学は、新しく人類史の問題に教育をもつて向き合うことによって、あの出来事の意味を謙虚にして誠実な解釈者でありたいと願っている。